

共同研究 ● 東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化（2013-2016）

インドネシアの華人系芸術家

2013年に始まったこの共同研究は現在までに5回の研究会を行った。各メンバーがそれぞれの事例を報告し、それらをどのようなテーマのもとに分析していくかということについて議論を重ねている。

本稿では共同研究のサブタイトルであるアイデンティティを取り上げる。アイデンティティを形成し得る要素や要因にはさまざまなものがあるが、ここでは芸術家の民族的アイデンティティに焦点を当ててその複合的で流動的なあり方を考えてみたい。筆者は、2014年5月にインドネシア・ジャワ島を拠点に創作活動を続ける女形ダンサーについての本を出版した（福岡2014）。ダンサーのディディ・ニニ・トウォは1954年生まれ、父親が福建出身の華人、母親がジャワ人でインドネシアでは「プラナカン *peranakan*」と呼ばれる華人系住民である。ディディの芸術活動の考察は華人系芸術家の表現と現代インドネシア社会との関係を考える契機となった。

インドネシアの華人系住民は1966年以降のスハルト政権

中国寺院での建立記念祭

2011年9月にジャワ島東部のグドにある中国寺院で建立記念祭が行われた。東南アジアの中国寺院は儒教、仏教、道教、民間信仰の混在という特徴が指摘されるが、「クレンテン *krenteng*」と呼ばれるインドネシアの中国寺院にもさまざまな神が祀られている。グドの寺院は出稼ぎに効験ありとされる廣澤尊王 *Kuang Tse Tsun Wang*（郭聖王）を主神とする（津田2010）が、敷地内には観音堂も建てられている。

祭りの初日には、ジャワ島各地の中国寺院からの神像がこの寺院に迎え入れられた。華人系ダンサーのディディは建立記念祭に招聘されて、初日の夜に敷地内の大ホールで創作作品を披露した。各地の寺院からは太鼓やゴングなどを積んだ山車も続々と到着し、2日目以降はパレードも行われた。寺院があるグドはイスラーム団体「ナフダトゥール・ウラマー（NU）」の本拠地で、祭りにはその関係者も招待された。宗教団体との共存をはかりつつも、こうした行事は盛大に行われるようになってきているようだ。



中国寺院の建立記念祭（2011年9月18日、ジャワ島東部グド）。

下における「同化政策」の名のもとで多くの苦難を経験した。公的な場での華人の文化表現は厳しく制限された一方で、華人はインドネシアを構成する民族集団の枠外に置かれて差別を受け、しばしば暴動の標的とされてきた（津田2011: 11-14）。しかし、32年間にわたって政権を掌握したスハルトの体制が1998年に終焉し、度重なる政権交代の中で華人に対する抑圧的政策は緩和されてきた。それとともに公的な場での華人の文化表現を目にする機会は増えてきている。

華人文化週間

2013年2月にはジャワ島中部ジョグジャカルタで華人文化週間の行事を見る機会に恵まれた。市内中心部の華人街に門が建てられ、そのお披露目も兼ねて行事が行われた。街中のショッピングモールの中には華人文化週間を宣伝するディスプレイが見られ、華人街は多くの人々にぎわった。

初日の夜に行われた開会式では、王宮のスルタンでもあるジョグジャカルタ特別区知事が華人文化週間の開会を宣言した。行事の実行委員長をつとめたのは、ムスリムであるジョグジャカルタ市長夫人であった。開会式の中でもさまざまな地域の芸能が披露され、行事全体を通して華人文化をはじめとする多文化の共存を重視することが示された。

ステージは3つあり、小ステージでは中国伝来の指人形劇の上演が行われ、中ステージではカラオケ大会が行われた。メインステージでは2日目の夜にミスコンテストが行われた。容姿に加えて中国語（華語）の能力も問われ、その一方でジョグジャカルタの歴史的文化遗产に関する知識も問われ、「華人系ジャワ人」としての資質が重視されていたのが印象的であった。

華人系芸術家のアイデンティティ

華人文化の表現がさかんになりつつある現状を実際の華人系芸術家はどのように感じているのだろうか。ディディは

2011年に筆者が行ったインタビューの中で、華人系であることよりも「インドネシア人」芸術家であることを強調していた（福岡 2014）。長期にわたって自らの身体に刻み込まれたジャワ舞踊の伝統は、彼にとって芸術家としてのアイデンティティを示す重要な要素である。またスハルト時代の32年間が活動の最盛期と重なった芸術家たちにとっては、インドネシア人として国の芸術の発展に貢献することが生き残る唯一の道でもあった。ディディもまたインドネシア人ダンサーとして創作を行う以外の選択肢がない時代の中で芸術家としての表現を模索してきた。また政策が変化しても華人に対する根強い差別はいまだに見られる現状もある。そうした中で華人系芸術家としての表現を追求することはたやすいことではない。一方で上記のさまざまな行事の中でディディは華人系芸術家の代表的存在として出演を依頼され、その期待に応えるべく華人性を強調する上演を行っているようにも見えた。とくに華人文化週間では開会式で中国の仮面舞踊を披露し、閉会式では白蛇伝を題材とする創作に取り組む姿も見られた。

ディディの回想からは、1965年以前のジャワ島で華人文化を含む多様な文化が享受されていたことがうかがえる。彼は幼少時にジャワ芸能とともに竜舞や指人形劇など華人の芸能にも親しんだ。こうした経験は彼の創作作品の中にも活かされてきた。時代の転換期を生きた華人系芸術家の多くは多文化的なアイデンティティを持ちながらも、それを自由に表現できない難しさを経験してきた。人類学者のヘルヤントは、華人系住民の解放や復活に関する議論が増えている一方で、エスニシティという概念そのものは問題にされてこなかったと指摘する。彼によれば、インドネシアにおける民族アイデンティティの問題は「華人系」か「原住民」という二項対立でとらえることはできず、人々は多様で複雑なアイデンティティを持つ。それらは流動的であり固定的なものではない（Heryanto 2014: 143-144）。ディディもまた時代の変化にさらされつつ自らの芸術表現を模索してきた。華人系芸術家たちが今後、華人としてのアイデンティティをどのように表現していくのかということについては、インタビュー調査をはじめとするさまざまな対話も重ねながら息の長い調査を行っていく必要があると感じている。

ポピュラーカルチャーにおける華人

ポストスハルト時代のインドネシアにおいて多様な価値観と多くの情報が交錯する中で、人々は国家のあり方、成熟した社会のあり方を模索している。筆者は2013年11月にジャワ島中部スマランで行われた華人文化会議に出席した。会議のテーマは「華人系インドネシア人：その生とアイデンティ



ショッピングモール内にある華人文化週間を宣伝するディスプレイ（2013年2月22日、ジャワ島中部ジョグジャカルタ）。



王宮のスルタンでもある知事が華人文化週間の開会の合図に太鼓をたたく（2013年2月21日、ジャワ島中部ジョグジャカルタ）。



華人文化週間2日目に開催されたミスコンテストの様子（2013年2月22日、ジャワ島中部ジョグジャカルタ）。

ティ」であり、多くの華人系インドネシア人研究者が自らの体験もふまえたうえで議論を交わしていた。会議で出会った人類学者のヘルヤントは、華人系をはじめとする多様な出自の映画人のライフヒストリーをたどる調査を行っていた。彼はその成果をまとめた著書の中で、上演芸術や映画において華人系をはじめインド系やヨーロッパ系の文化人・芸術家が重要な役割を果たしてきたが、その存在は公の歴史や記憶の中から抹消されてきたと述べている（Heryanto 2014: 135）。また、2008年に編集したインドネシアのポピュラーカルチャーに関する本の中では、華人を描いた2つの映画、「Ca Bau Kan（茶房館）」（ニア・ディナタ監督 2002年）と「ギー Gie」（リリ・リザ監督 2005年）を取り上げて、インドネシア社会における反響や華人系研究者による評価について分析を行った（Heryanto 2008: 70-92）。メディアにおける文化表現もまた、人々のアイデンティティ形成に多大な影響力を持つ。

華人系文化人の活動の歩みをたどる試みや、ポピュラーカルチャーにおける華人性の表現についての議論はさかんになりつつある。芸術表現やメディアが民族的アイデンティティを示す重要な手段となり社会に影響を与える事例は、インドネシアに限らず多民族の混成する東南アジア社会に多く見られる。研究会を通して、芸術やメディアが人々のアイデン

ティティ形成に関する持続的な交渉やせめぎ合いの場を作り出していく状況を考えていきたい。

【参考文献】

- 福岡まどか 2014 『性を超えるダンサー ディディ・ニニ・トウォ』 古屋均 写真めぐん。
- Heryanto, Ariel 2014 *Identity and pleasure: The politics of Indonesian screen culture*. Singapore: NUS Press in association with Kyoto University Press, Japan.
- Heryanto, Ariel (ed.) 2008 *Popular culture in Indonesia: Fluid identities in post-authoritarian politics*. London and New York: Routledge.
- 津田浩司 2010 「今、ジャワの寺廟で何が起きているか——ポスト・スハルト期インドネシアの国家、宗教、華人コミュニティ」『アジア・アフリカ言語文化研究』79: 37-71。
- 2011 「『華人性』の民族誌——体制転換期インドネシアの地方都市のフィールドから」 世界思想社。

ふくおかまどか

大阪大学大学院人間科学研究科グローバル人間学専攻准教授。専攻は民族音楽学。インドネシアの舞踊研究を中心に東南アジアの上演芸術研究に従事。論文に「女性性、男性性を考える——インドネシアのポピュラーカルチャーにおけるジェンダーとセクシュアリティ」（『大阪大学大学院人間文化研究科紀要』38: 79-103 2012年）、*Cross-Gender Attempts by Indonesian Female Impersonator Dancer Didik Nini Thowok* (*Wacana Seni: Journal of Arts Discourse* 13: 57-83, 2014) など。